

教育方法学

最終レポート



教育学科2回生
清水利沙
D4

目次

第1章 チームで構成した学校について

1. 教育方針
2. 園内の環境
3. 園の特色
4. 保育サービス

第2章 本園の方針と具体的指導方法

1. 子どもを取り巻く環境の変化
2. 望まれる幼稚園教育とは
3. 自然と触れ合うことの意義
4. 保護者と共に取り組む野菜栽培活動

第3章 学習者の評価について

1. 保育における評価とは
2. 保育の省察と記録
3. 具体的な評価方法

第4章 この講義の感想と希望

1. チーム学習について
2. 評価し合うことについて
3. I-support について
4. 保育所・幼稚園用の課題について

第1章 チームで構想した学校について

現在、「幼稚園」と「保育園」は文部科学省と厚生労働省に所轄官庁が分かれ、法制度上厳格に区分されている。しかし、近年少子化や核家族化が進行し、また保護者の就労形態も変わるといった時代の流れと共に、世間が求める園の形が変わってきたこともまた事実である。このような世間のニーズに答えた新たな幼稚園として「やまびこ園」を構想した。「幼稚園」と「保育園」の双方の要素を取り入れながら、両園の枠を越えた幼保一元化施設を目指す。



1. 教育方針

遊びとしつけを通して「生きる力の基礎」を育む

子どもたちは、良い人間関係や、やさしさや思いやり、思考力や想像力、真剣に物事に取り組む姿勢、物事を解決する力、集中力など、すべて「遊び」を通して身に付けていく。子どもたちの生活から「遊び」を奪うことは、このような力を養う機会を失わせ、人間ら

しく生きることを困難にする。したがって、幼児期において遊ぶことは何よりも大切なことであり、園生活においても遊びを中心とした活動がなされるべきである。

やまびこ園では、

○豊かな自然な中から自主的に遊びを創造する力を育成する

○遊びの中から様々なことを発見し学び、人間性豊かな子どもを育成する

ことを目標とし、子どもたちが伸び伸びと遊べるような環境を設定して、日々の活動を行うことにする。

一方、小学校では、新一年生の授業が、子どもたちの落ち着きのなさ・けじめのなさ・耐性のなさ・注目度や傾聴度の低さ・友達作りの未熟さなどにより成立しにくい「小一プログラム」が問題となっている。これは近頃話題となっている「自由保育」が誤った方向へ進んでいき、本来の「自由保育」からかけ離れた「放任保育」となっているという事実が原因の一つとして考えられる。「自由に、個性を大切に」は重要なことだが、小学校以降の生活や学習を念頭において、基本的なしつけや生活のルールをきちんと身に付けることもまた、幼児期において必要なことだといえる。

以上のようなことから、「遊び」と「しつけ」が共存した保育を展開することによって、「生きる力の基礎」を培い、卒園後に多様な能力を発揮して学べる子どもを育てることを本園の方針とする。

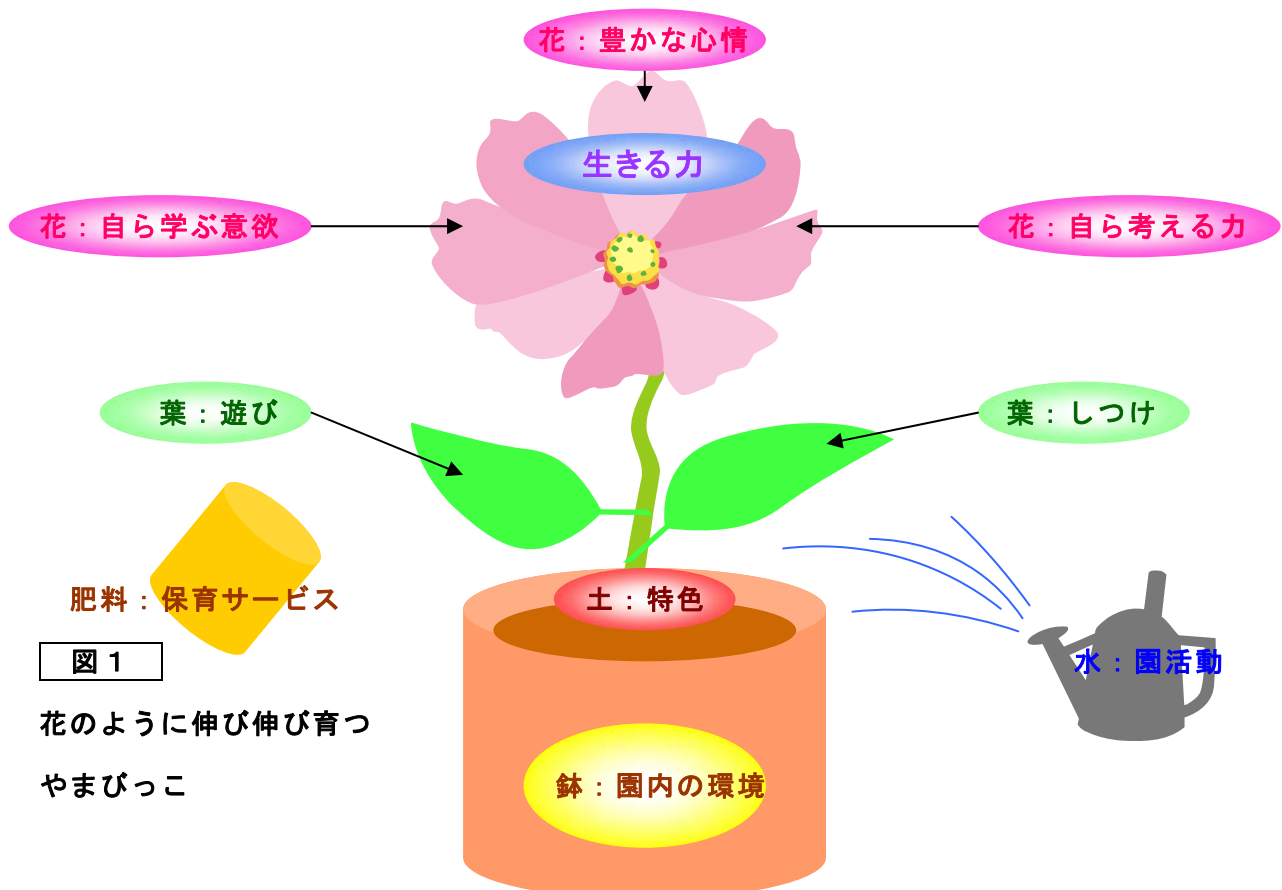


図 1

花のように伸び伸び育つ
やまびっこ

2. 園内の環境（図1：鉢）

やまびこ園は自然豊かな環境の中に設置されている。園内には山や川があり、現在は失われつつある自然を身近に感じながら、広い空間を使って伸び伸びと活動することができる。これらの環境は、

- 動植物との触れ合いの中で、自然の摂理を理解し、生命の尊さ、自然の大切さを学ばせる。
- 自然物を使って遊びを創造する力を養う。
- 野外活動を通して健康でたくましい子どもに育てる。

をねらいに定めて設計したものである。

- *子どもの安全面には十分注意した設計がされており、死角や荒廃した場所はない。常に安全面や衛生面を点検し、整備している。自然公園などをイメージしてもらいたい。また、不審者の侵入を防ぐため、門には警備員を配置する。

3. 園の特色（図1：土）

(1) 施設設備

- ・一階建て…隣接する老人ホームとの交流もあることからバリアフリーの面を考えた。全てのクラスが同じ階にすることで、異年齢児交流の機会を増やすことにもつながる。
- ・給食室…栄養士が子どもたちの栄養バランスを考えた献立を作り、調理する。
- ・保健室…養護教諭を配置。けがや病気などにすぐに適切な処置ができる。心のケアが必要な子どもにとっても重要な存在である。
- ・絵本室…絵本は想像性を豊かにし、言語の獲得にも役立つ文化財である。たくさんの絵本などを用意し、好きなときにいつでも読めるように絵本室を設けた。

(2) クラス編成

	0～2歳児クラス	3歳児クラス	4歳児クラス	5歳児クラス
クラス数	1	2	2	2
園児数	0～1歳児：10人 2歳児：10人	20人	20人	20人
教員数	10人 (先生1：園児2)	男女一人ずつ	男女一人ずつ	男女一人ずつ

(3) 教員構成

- ・教員は幼稚園教諭免許状と保育士資格を共に取得している者のみを採用する。やまびこ園では0歳児からの入園を受け入れるので、乳児の保育について専門的な知識と技術を持った保育士としての役割が必要だからである。また、幼稚園教諭の免許状だけでは乳児を預けることに不安を感じる保護者への対応策でもある。
- ・教員数における男女の比率は同じものとする。

(理由) 1. 男性教員と女性教員が持つ、それぞれのメリット生かすため。

2. 子どもによっては女性教員よりも男性教員の方が相性が良かったり、またその逆もあるため。
3. 男女平等に雇用することで、子どもたちにも自然と男女平等であることを理解させるため。

(4) 高齢者との交流会

隣接した老人ホームの高齢者との交流会を定期的に行う。核家族化が進む中、高齢者との関わりが減った子どもたちにとって貴重な体験となり、高齢者にとっても楽しい時間となる。

(5) ボランティア活動

ゴミ拾いやリサイクル活動を園外保育の一環として、地域の団体と協力して行う。環境を守る精神、社会性の発達にも役立つ取り組みとなる。

(6) 親子ふれあい行事

親は子どもを園に預けきってはいけない。親子でふれあう行事を定期的に行うことによって、我が子の成長・発達を確認でき、また家庭では見ることのできない子どもの新たな一面を知ることができ、より良い親子関係を築ききっかけとなる。

4. 保育サービス(図1:肥料)

現在、幼稚園では少子化や保護者の就労形態の変化から入園児数が減少傾向にあり、いかに園児を確保するかが園存続の鍵となる。反対に保育園では待機児が増加傾向にある。そのような子どもたちが入れるような園にすることで、園児数確保につながる。どこの幼稚園もしくは保育園に入園させるかは、子どもではなく保護者の意思によることが多い。保護者にとっても、子どもにとっても魅力的な園となるような保育サービスを実施する。

<0歳児からの受け入れ>

やまびこ園では0歳児から入園が可能である。保育者は「保育のパートナー」として保護者と共

に保育をすすめる。3歳児からの入園も可能である。0歳児～5歳児までの保育を「長時間保育」、3歳児～5歳児までの保育を「短時間保育」とする。

<延長保育>

保護者の就労形態及び生活実態などにより、やむを得ないと認められる場合は、通常保育前後に延長保育を実施する。

<給食制>

子どもたちの栄養面のバランスを考えて作られた献立のもと、栄養士が調理する。集団で食べることによって、食事のマナー・配膳・好き嫌いをなくす・後片付けなど、食教育を行うことができる。また、調理室への見学も行い、調理過程や食事を作る大変さ、食べれることのありがたさを感じとらせる。

園活動(図1:水)に関しては第2章でくわしく述べる。

第2章 本園の方針と具体的な指導方法

5歳児が自然と触れ合うことで豊かな感情や意欲・思考力を育むことを目的とした、
保護者と共に取り組むサツマイモ栽培活動



1・子どもを取り巻く環境の変化

子どもを取り巻く環境は、核家族化、少子化、就労形態の変化、都市化、情報化など著しく変化

している。このような変化は、子どもの直接体験の機会を減らし、結果的に人間関係の希薄化、家庭及び地域社会の教育力の低下を招いている。これらの変化に伴う課題に対応した幼児教育が、現在求められている。

2・望まれる幼稚園教育とは

『幼稚園教育要領(平成10年改訂)』の「第3章 指導計画作成上の留意事項」の「一般的な留意事項」の8番目に、「幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること」と書かれている。また、『幼稚園教育要領解説(平成11年6月)』では、幼稚園教育について「小学校教育の先取りをすることではなく、就学前までの幼児期にふさわしい教育を行うことが最も肝心なことである。つまり、幼児が遊び、生活が充実し、発展することを援助していくことである。」と書かれている。さらに、「幼稚園教育は幼児期の発達に応じて幼児の生きる力の基礎を育成するものである。特に、幼児なりに好奇心や探究心をもち、問題を見いだしたり、解決したりする力を育てること、豊かな感性を発揮したりする機会を提供し、それを伸ばしていくことが大切である。」と記されている。ここから、幼稚園教育は小学校以降の生活や学習の基盤となり、幼稚園から小学校へ無理なく円滑に移行できるような教育が求められていることがわかる。しかしその教育は幼児期にふさわしいものでなくてはならない。「早期英才教育」とは異なり、「後伸びする力」つまり「生きる力」を培うことを理解しなければならない。とくに注目したい点は、上記下線部にもあるように「好奇心」や「探究心」、「問題発見・解決能力＝思考力」であり、これらの力を幼児期に育てることは、現在深刻化している「学力低下」や「学習意欲低下」の問題の歯止めとなるのではないだろうか。

3・自然と触れ合うことの意義

子どもにとって自然環境は、最高の学びの場であり、遊びの場である。子どもは自然との直接的経験を通して、自然環境の中で成長する。『幼稚園教育要領解説(平成11年6月)』には「自然などの身近な事象と十分にかかわりをもつようにしてそれらに対する興味や関心を育て、幼児の認識や思考、積極的に周囲とかかわろうとする意欲など、さまざまな能力を養うことは、心身を調和的に発達させる上で大切なことである。」と記されている。また同書「第2章 ねらい及び内容」の「第2節 各領域に示す事項」の「身近な環境とのかかわりに関する領域 環境」には、「変容しつつも変わらずにそこにある自然との出会いを通して、幼児の心は安定し、安らぎを感じる。その落

ち着いた気持ちの中から、自然への不思議さや自然と交わる喜びの感情がわき上がるだろう。もっと自然のいろいろな面に触れてみたいという好奇心が生まれ、探求したくなっていく。どうしてこうなっているのだろうと思考力を働かせる。」とある。自然とかかわる実体験を通して、子どもたちは今後の学習活動に必要な「興味関心」、「意欲」、「好奇心」、「探究心」、「思考力」を培うことができるのだ。幼稚園教育において自然は“優れた教材であり、教師である”といえる。

4・保護者と共に取り組む野菜栽培活動

(1)栽培活動の教育効果

自然と触れ合う体験は、様々なものが考えられるが、今回は「栽培活動」に注目したい。『保育内容 環境〔第2版〕』（1999）によると「栽培・飼育に直接参加することは、情操や知的好奇心、科学的態度を育成し、ひいては生命の畏敬の念へと高めるものである。」と書いている。また上岡勢津（1997）は『自然の不思議を見つけよう』の中で、「くり返し栽培をしていると、何かに気づいたり、何かの疑問や発見があったり、その疑問が仲間に広がったりします。その“何か”が、実体験をとおしてつながっていくように思います。そうすると栽培活動は楽しくなり、無理なく意欲が呼びおこされていくようでした。」と述べている。栽培活動は、種、発芽、生長、開花、結果、収穫、採種などの過程を体験することができる。こうした一連の活動の中で、「こんな小さな種があんなに大きく育つんだ！」「こんなきれいな花が咲くんだ！」「根っこはこんな風になっているんだ！」といった、実際に育ててみなければ気づかないような発見がある。そこから興味を深め、次の活動へと意欲的に結びつけることができる。また、植物には栽培する場所や日光、水、肥料などによる生長の違いがあり、生長に適した時期も異なる。ここからも新たな発見があり、さらに「なんで枯れちゃったのだろうか？」「土の中はどんな風になっているのかな？」「どうしてこっちの方が育つのかな？」など、様々な疑問が生まれる。その疑問を自らで解決することが「学び」へとつながる。

(2)何を栽培するか

はじめに、ある幼稚園での実践例について紹介する。

園内に「カレーライスの畑」としてタマネギとニンジンとジャガイモを植え、収穫して5歳児が調理し、全園児で食べることにしている。いつカレーを作れるようになるかが楽しみで、野菜が育つあいだに次第に興味をもつ子どもが増え、目的をもって栽培に参加するようになった。

これは子どもの好きな食べ物と栽培を結びつけたよい例である。最終的には収穫し、食べることができる植物を栽培することで、目的をもって意欲的に活動に取り組むことができる。自分が

育てたものを食べることで、食べることの喜びを感じ、食べ物を大切に作る心が生まれる。栽培するものは、季節感がわかりやすいもので、子どもたちが食べなれていて、親しみのあるものを選ぶのがポイントである。

<幼稚園や保育所で栽培活動として取り組まれることの多い食べられる植物>

ハツカダイコン・ダイコン・ニンジン・ジャガイモ・サツマイモ・イチゴ・カボチャ・トマト・キュウリ・トウモロコシ・エダマメ・コマツナ・ラッカセイ・カイワレダイコン など

(3) 保護者との共同作業

保護者の中には子どもの園生活に無関心な人もいる。関心があっても、参観日や式典以外は園に入ることがなく、子どもたちが毎日どのようにして園生活を過ごしているかをくわしく知らない保護者もいる。幼児の思いや考えに共感する存在として保護者にも栽培活動に参加してもらうことで、保護者自身にも植物の生長に興味をもち我が子と一緒に様々な感情体験をしてほしいと考えた。家庭では見れない我が子の新たな一面が発見でき、親子間の信頼関係をより一層深めることができる。また、親子で体験を共有したことで、家庭で食事の時などに栽培活動などの会話が広がるであろう。幼児期は、保護者の考え方や家庭での過ごし方が大きな影響を与えるので、保護者に対する働きかけが重要である。保護者の自然に対する興味・関心が高まれば、自然の中へ我が子連れ出す機会が増えるし、幼児と自然とのかかわりを丁寧に受け止める家庭では、望ましい家庭環境が生み出されることが多いのではないだろうか。そのためには、園からも自然とかかわることの重要性やそこから得られることを言葉だけでなく、保護者自身の直接体験を加えながら伝えることが必要である。

(4) 私たちの園での活動内容 ～サツマイモを育てよう～

以上のような論点から、私たちの園では5歳児を対象にサツマイモを栽培する取り組みを行う。栽培活動には保護者にも負担にならない程度に参加をお願いする。栽培方法などは地域の農家の方々にアドバイスを受けると同時に、園児たちに地域のお百姓さんの仕事を知ってもらう。園内に畑を作って栽培活動を身近なものとし、生長過程に興味・関心を持たせ、継続的に観察させる。

<活動予定>

4月：畑作り(草取り・石拾い・土運び・砂運び)

・作業を通して協力する気持ちや養い、栽培活動を身近なものと感じさせる。

→今後の栽培活動への意欲を養う

5月：サツマイモの苗を植えつける

・一人ひとりが苗を植えることで、生長に**関心**を持たせる。

6月：水まき、観察

・芽・葉・花・実の大きさや形や色などを見たり触ったりして**観察**させる。

→観察を通して様々なことを**発見**する。→**思考**する。

7月：草取りをする、観察

・草取りをする中で、身近な昆虫や雑草とふれあう。

8月：夏休み(夏期保育中に草取り)

9月：土の中のイモを観察する

・土の中の状態、生長状況を確認し、収穫への期待を高める。

→活動を最後までやりとげるための意欲を持たせる。

10月：イモ掘り、畑の後始末・整備、ふかしイモを食べる

・保護者・友達と協力してイモを掘る。

・畑の後始末までしっかりさせる。 →しつけ

・とれたてのイモのおいしさを味わい、収穫を喜び合う。 →**豊かな心情**

11月：やきいもパーティー(老人ホームの高齢者を招待)

・教員・保護者が焼いたイモを、高齢者と一緒に全園児で食べる。

・イモにまつわるゲームをしたり、歌をうたったりする。

12月：スイートポテト作り

・残しておいたイモを使って、園児たちにスイートポテトを作らせる。

→自分たちで調理することによって、**創造力**・**思考力**を育む

○幼児が水やり・草とりなど毎日の世話をする。

○保護者は交替で毎週火曜日に肥料やり・草取りなどを幼児と一緒にやる。保護者が世話をする日には、栽培カードに幼児と一緒に記録をしてもらう。

第3章 学習者の評価について

幼児教育の世界では「評価」というものは存在しない、と考える人がいる。それもその通りで、幼稚園や保育所では学力テストは行わないし、通知表に成績をつけて子どもに渡すこともない。だから

ら、「評価」を成績評価のことと捉えると、幼児教育では評価は行わないということになる。しかし、通知表で示される学業成績は正確には「評定」とよばれるべきで、本来の意味の「評価」ではない。この「評定」は幼児教育においては不必要なものだが、「評価」は必ずしも必要ではないとは言いきれない。幼児一人ひとりのよさと可能性を見出し育むために、また、子どもたちが自分らしさを発揮しながら発達に必要な経験を積み重ねていくために、保育者は適切な評価をして援助すべきではないだろうか。今回はそういったことを踏まえながら、保育における評価について述べていく。

1. 保育における評価とは

森上史朗ら編『幼稚園教育と評価』では、幼稚園での評価について次のように述べている。

「幼稚園でいう評価とは、ひとりひとりの幼児を他の幼児と比べて優劣をつけて評定することではないのです。保育の営みの中で①幼児の姿がどのように変容していくかを捉えながら、そのような姿を生み出してきた②さまざまな状況について適切であったかどうかを検討して、よりよい指導を考へることが評価の重要な意味なのです。」p.79

ここからもわかるように、保育における評価は、子どもたちの行動や成果の良し悪しを判断して決めるものではない。例えば、「なわとびが何回とべたか」などを書き込んでチェックする「チェック表」では、幼児の育ちのプロセスや意味が捉えられない。大切なのは「子どもがなわとびがとべるようになるまでの過程」であり、それを評価する必要がある。このような「ガンバリ表」や「チェック表」で評点化する場合は、どうしても客観的に捉えやすい能力面や技能面が中心になりがちである。しかし、保育においては客観的に捉えにくい心情、意欲、態度などの内面的な育ちに目を向けることが重要で、そうした面の評価をどのようにしたらよいか大きな課題になる。

『幼児教育の方法』という文献によると、保育における評価には「子どもに対する評価」と、「保育実践に対する評価」と大きく2つ分けることができるという。

たとえば、A 先生が担任しているクラスに、他の子が仲良く遊んでいるところに入って邪魔をしたり、突然他の子にかみついたりパンチやキックをしたりすることが多い B 男がいたとする。A 先生は困った行動をするたびに B 男を注意するが、B 男はその注意さえ聞こうとしない。このような B 男を、A 先生は「自分勝手に乱暴な子」と認識している。この「自分勝手に乱暴な子」と捉えることは、A 先生が B 男に抱いている一種の「評価」だと考えられる。この評価が「子どもに対する評価」である。上記下線部①がこれにあたり、一般には「子ども理解」といわれる。一方、B 男に対する A 先生の対応(例:問題行動を起こす度にしかりつける)が適切であったかどうかを評価するのが「保育実践に対する評価」である。上記下線部②にもあるように、指導の過程を反省・評価し、幼児の発達を

促すためのよりよい指導を生み出していかなければならない。

2. 保育の省察と記録

幼稚園教育要領の第3章「指導計画作成上の留意事項」では「幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程について反省や評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図ること」とされ、保育所保育指針の第11章「保育の計画作成上の留意事項」では「指導計画は、それに基づいて行われた保育の過程を、子どもの実態や子どもを取り巻く状況の変化などに即して反省、評価し、その改善に努めること」とされている。ここでいう「反省や評価」は、自らの実践を振り返り、省察することを意味している。

倉橋惣三の『育ての心』という本の中に次のような一節がある。

〔子どもが帰った後〕

子供らが帰った後、その日の保育が済んで、まずほっとするのはひと時。大切なのはそれからである。

子どもといっしょにいる間は、自分のしていることを反省したり、考えたりする暇はない。子どもの中に入り込みきって、心に一寸の隙間も残らない。ただ一心不乱。

子どもが帰った後で、朝からいろいろのことが思いかえされる。われながら、はっと顔の赤くなることもある。ああ済まないことをしたと、その子の顔が見えてくることもしばしばある。保育者は……。一体私は……。とまで思い込まれることもしばしばである。大切なのは此の時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は一歩進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んでいけるから。

（倉橋惣三『育ての心』より）

倉橋が述べている「反省を重ねる」ことの意味は、単に悪かったとか、すまなかったと思うというだけの意味ではない。自分の保育を省みて考え、明日はどうするのか思いめぐらすことまでを含むものである。そうすることによって、一歩進んだ保育者として子どもの方へ入り込んでいけるのである。

子ども理解のために省察することに加えて、自らの保育のあり方について反省と省察を行うことは非常に大切なことである。

3. 具体的な評価方法

幼児の評価をするにあたって、日々の保育の記録が必要なことは言うまでもない。それと同時に、

保育者の指導に対する評価についても記録は欠くことができない。

以下のような記録用紙に保育の記録を記入することによって、評価をしていく。

No	幼児名
----	-----

月・日	幼児の姿	指導の反省・評価	備考
	気づいたことを、気づいたときに記録する。時々、全員の用紙を見直すことで、保育者の見る目の偏りをできるだけでなくすようにする。	その幼児に対しての保育者のかかわり方や環境構成全体に対しての反省を記入している。	その幼児への願いや思い、あるいは、他の保育者からの指摘などを自由に記入している。
(例) 第2章 サツマイモの栽培活動の記録 (A子の場合)			
6月3日	草取りをしているときに小さなダンゴムシを見つける。それまで草取りに興味を持たなかったA子だが今日は熱心に草取りをした。しかししばらくするとあきて、畑から離れてしまった。	ダンゴムシに興味を持った時点で、もっとそれが持続するような声かけをすべきだった。	〇〇先生から土の中の小さな生き物たちの絵本の読み聞かせをしてみたらとアドバイスを頂いた。

「子どもに対する評価」: 今まで草取りに興味を持たなかったA子が、ダンゴムシをきっかけに少しだけ興味を持つようになった。

「保育実践に対する評価」: 声かけが不十分だった。

第4章 この講義の感想と希望

(1) チーム学習について

教育方法学の授業は、今まで受けてきた講義とは全くちがう講義だったので、毎週新鮮な気持ちで受けることができた。私にとって「教育方法学」は“おもしろい授業”であったが、それと同じくらい“こわい授業”であった。

実は私はチーム学習があまり好きではない。なぜかという、これまでにしてきたグループ学習は、いつも「やる人」と「やらない人」に別れていて、「やる人」は「やらない人」の分まで作業をしなければならなかったからだ。それなのにその成果を発表するときは「やらない人」までまるで作業を積極的にやったかのような顔をしていることも許せなかった。しかし今回この授業を受けて、今まで受けてきたグループ学習はその方法に問題があったのではないかと考えるようになった。規範や係などを決めず、形だけの「チーム」となっていて、これからお互いを高め合って学習していくチームとして成り立っていなかったのだ。今回のチーム学習も最初は不安があった。メンバーは同じ学科の仲間とはいえ、あまり親しく話したことがない人もいる。それぞれの考え方が異なる中で一つの「理想の学校」が構想できるものなのかも不安だった。その不安は的中し、前半はスムーズには進まなく、やはり「やる人」と「やらない人」に別れてしまった。しかし、「チーム機能不全診断テスト」などでチーム学習について振り返り、反省することができ、メンバー内で信頼関係ができてきた。後半はお互いの得意分野を活かしあってうまく学習ができたように思う。

チーム学習は、「チームであるのだからそれぞれが少しずつ手をぬいても大丈夫。」というものではない。チームでやるからこそ一人ひとりの責任は大きく、一人が手をぬいたり欠席したら、それはチーム学習に大きく影響するので“こわい授業”だった。個人が100%の力を持ち寄るのは当たり前で、120%ぐらいの力を持ち寄ってそれをチームで精選するぐらいがちょうどいいのかもしれない。

今回のチーム学習で学んだこと、得たものは今後社会で働いていく上で役立てると思う。今後の大学生活でも活かしていきたい。

(2) 評価し合うことについて

この講義では自分たちの発表の態度や内容を評価してもらったり、自分のレポートを評価してもらったりと、自分以外の他者に評価してもらう機会が多かった。これまでも自分の発表を評価してもらう機会は何度かあったが、それは「発表のおまけ」のようなものだった。この授業では、評価は問題点を検討し、改善していくための重要なプロセスの一つであり、そこから高めていくことができた。ただ単に構想内容を修正するだけでなく、「どうして伝わらなかったのだろう…」と発表の方法

についても考えることができた。自分たちの考えを他者にわかりやすく説明することには技術が必要だということがわかった。

自分のレポートを評価してもらおうというのもとてもいい経験になった。レポートは自分か提出先の先生しか見ることはなく、提出したレポートは点数となって返ってくるので、何がよかったのか、何が悪かったのか、どの辺りをもっとどうすべきかがわからなかった。私はそのことを常に疑問に思っていた。Aの評価をもらっても、自分のレポートのどこが良かったのかわからず、Bの評価をもらっても、自分には何が足りなかったのかが全くわからない。これでは自分のレポートを書く力が伸びず、また同じことを繰り返すことになる。直接先生に聞きに行こうかと思ったことさえある。

この授業で初めて自分と先生以外の第三者にレポートを見てもらい、評価してもらうことによって得るものがたくさんあった。自分では満足のいくものであっても、他者にとっては不十分な点や、自分では気づくことができない点を指摘してもらえた。そこからレポートを練り直すことができた。「私が求めていたのはこれだ！」と感じた。評価はいいか悪いかを決めるだけのものではなく、そこから学んでいくためのものなのだ実感した。

(3) I-support について

I-support は今年初めて利用したが、「すごいシステムだな」とただただ驚いた。何度か質問をしたが、すぐに返信していただいたのでとても助かった。教材創庫も参考になるものがたくさん入っていて、課題をするのに非常に役立った。

ただ、私たちの班は掲示板などをうまく使うことができなかったのが残念である。これを使ったら、グループ学習がもっとスムーズに進んだように思う。今後 I-support を使う機会があれば、もっとうまく利用したい。

これからの学校教育では、このようなコンピュータを活用した教育が多く行われるようになるだろう。いい点・悪い点を踏まえた上で、子どもたちに便利な利用方法を伝え、楽しい取り組みや学習活動を行いたい。

(4) 保育所・幼稚園用の課題について

教育学科の人は小学校教員免許を取る人が大半であることから、教育学科全員で受ける講義は小学校教育をメインとしたものが多かった。正直に言うと、「なぜ小学校のことばかりなのだろう。幼稚園教諭や保育士を目指している人のことも考えてほしい。」と感じることもあった。もちろん幼児教育を学ぶにあたって、小学校以降の教育について理解することは必要なことである。しかしどうしても物足りなさを感じてしまうのだ。

この講義では、「理想の幼稚園」を構想することができ、また保育所・幼稚園用の課題が取り組

めてとても楽しかった。興味のある分野であり、ある程度の知識も持っている分野だったので学習がしやすかった。それだけでなく、小学校の課題は幼稚園や保育所の課題でもあり、幼児期が小学校以降の学習の基盤となることもわかった。自分の中の幼児教育の知識の幅が広がった。今後も、たとえ少数であっても、幼児教育を学んでいるひとにむけた課題を示していただきたい。

—参考文献・URL—

○西之園晴夫(2004)『教育の方法と技術』 ミネルヴァ書房

○山内唱道(2000)『子どもと環境 自然・社会とかかわる子どもたち』文化書房博文社

○中央教育審議会(平成16年10月29日)中間報告「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について」

<http://www.mext.go.jp/b-menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04102701/003.htm> (2004.11.28 アクセス)

○文部省(平成4年10月)『幼児理解と評価』

○小田豊ほか(2004)『幼児教育の方法』 北大路書房

—引用文献—

○幼稚園教育要領(平成10年改訂)文部省

○幼稚園教育要領解説(平成11年6月)文部省 p.47 p.105 p.178

○中沢和子ほか(2001)『保育内容 環境[第2版]』 建白社 p.78

○上岡勢津(1997)『自然の不思議 みつけよう』 あゆみ出版 p.98

○森上史朗ほか(1992)『幼児教育と評価』 ひかりのくに株式会社 p.79

○倉橋惣三(1976)『育ての心(上)』 フレーベル館 p.15

<自己評価表>

レポートが目指しているレベル (A*)

このレポートでアピールしたいポイント

「見やすく・楽しく・わかりやすく」をモットーにつくりました。第1章のイラストや図は描くのに苦労した分、いいものができたと思います。

レポートを次の視点で自己評価してください。

①参考文献・引用文献、参照URLを示すことが できた・できなかった]

②「感想」（「だと思ふ」調）ではなく「論理」（「である」調）で

主張〔できた・できなかった〕

③読み手が読みやすいように配慮することが〔できた・できなかった〕

（長すぎる文章を羅列するのではなく小見出しをつけたか、図や表の表示量は適切であったか など）

<レポート公開同意書>

このレポートを後輩が受講する「教育方法学」で公開してもよいですか。また大学の web 上に公開が認められるとしたら web 上に公開してもよいですか。

後輩への公開について（1） web 上の公開について（1）

1. 実名入りで公開してもかまいません
2. 公開してもかまいませんが、匿名を希望します
3. 公開しては困ります

2005 年 1 月 20 日 氏名（清水 利沙）